

中国のほんの話(23)

テレビドラマとその原作(1)

海岩『玉観音』

蔭山 達弥

ドラマ不振と言われる昨今、医学界の内幕を描いた山崎豊子原作『白い巨塔』が再びテレビドラマ化され、話題を呼んでいる。本屋の店先には映画やドラマ化された原作の数々が、話題作として並んでいる。

中国でもテレビドラマが大ヒットすると、その原作は飛ぶように売れる。90年代以降その傾向は顕著で、最近では原作にビデオCD(ドラマの一部)を付録として付けるようになってきている。

半年を費やして撮影し、最近中国で放送され話題を呼んだ『玉観音』の原作者・海岩もドラマ化された原作を数多く世に出している一人である。彼が書いた作品は次から次へとテレビドラマ化され、大ヒットする。都市生活者で彼の名を知らない人はまずいない。

海岩は二つの顔を持つ男性だ。名刺の一方には「中国旅遊協会副会長、中国旅遊ホテル業協会会長、中国国有資産青年総裁協会副会長、中国作家協会会員、北京第二外国語学院兼職教授」、もう一方には「錦江(グループ)有限公司副総裁、錦江(北方)管理有限公司取締役会長・総支配人、北京崑崙飯店有限公司取締役会長」と印刷されている。彼には学歴が無い。15歳で兵隊になり、労働者をやり、警察官にもなり、その後ホテル業に就いた。

彼は酒、タバコをやらず、ポケットベルや携帯電話も似合わない。時間外の真夜中に小説を書き、脚本を練るのは名誉と利益という誘惑があるので、趣味には入らない。純粋に趣味といえるものは猫や犬を飼うこと、そして室内装飾である。多くの協力者に「上品でやさしい」と

言われる海岩は、一見弱々しそうに見えるが、ほとぼしるように何かを述べる時、彼の眼差し、語気、ジェスチャーは彼自身の内に蓄えられた能力を感じさせる。

海岩の書く愛情は重苦しく、残酷だ。しかも海岩の小説に共通する特徴は、男性は純情で善良、理想を追い求め、女性は残酷で現実的、理想を粉碎してしまう。これは海岩の子供の頃の家庭環境と関係があるかもしれない。

海岩が3歳の時、両親が別居、9歳の時、両親は離婚した。子供の時に不愉快な思いをしたものは脆弱であるか、強靱であるかのどちらかだ。彼自身はこの両方の面を持っているという。幼い時に両親のいざこざを見たものは、どちらか一方に偏らない協調性、他人とうまく付き合う知恵が鍛練されてくる。このように不幸の中で育つと、幸福の中で成長するより、役立つ人になる割合は多くなる。同様に愛情が順調に運んでいる人に愛情小説は書けないものだと言っている。

海岩の小説はすべて女性について書かれていて、女性について研究することが主になっている。『玉観音』の扉にはこう書かれている。「この物語を私たちに落ち着いた、夢のような、寛容な、愛撫するような気持ちを得させてくれるすべての女性に捧げる。彼女たちが私たちよりももっと幸せであるようにと願う。」

雲南省の景洪で麻薬の取り締まりに当たる子連れの婦人隊員(主人公)と金持ちの青年との恋物語である『玉観音』は、主人公の両親、麻薬取締大隊の上司や同僚、主人公の元恋人(麻薬の密売人として逮捕)、別れた亭主やその両親が美しい雲南の風景に綾なす大人のラブストーリーである。

かげやま たつや(助教授・中国文学)

